



Title	デンマーク語のs-形動詞による中立態
Author(s)	新谷, 俊裕
Citation	IDUN. 1986, 7, p. 5-25
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/95849
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

デンマーク語の s-形動詞による中立態

新 谷 俊 裕

1. デンマーク語の態について論じる場合、概して次のような文が考えられる。

- (1) Ole slog Peter i hovedet.

＜オーレはペーターの頭を殴った。＞

- (2) Danskerne drikker meget til jul.

＜デンマーク人はクリスマスに、よく酒を飲む。＞

- (3) Peter blev slået ned i aftes.

＜ペーターは昨夜殴り倒された。＞

- (4) Den omtalte bog kan stadig købes hos N.N.

＜その話題の本は、まだ某本屋で買うことができる。＞

- (5) Vi mødes og skilles.

＜我々は会い、そして別れる／逢うは別れの始め。＞

- (6) De synes lykkelige. <かれらは幸せそうだ。＞

例文(1), (2)は能動態の文, (3), (4)は受動態の文である。前者は動詞の能動態形により構成され, 後者は blive/være+動詞の過去分詞による受動態構文や動詞の受動態形(s-形動詞)により構成される。拙論では能動態の文, 受動態の文をそれぞれ能動態, 受動態と略称し, 動詞の能動態形や受動態形をそれぞれ能動形, 受動形と略称する。

概して能動態はそれに対応する受動態に書き換えることができ, 受動態はそれに対応する能動態に書き換えることができる。そこで(1)―(4)のそれぞれに対応する態を求めると次のようになる。

- (1') Peter blev slået i hovedet af Ole.

＜ペーターはオーレに頭を殴られた。＞

(2') Der drikkes meget til jul i Danmark.

＜デンマークではクリスマスによく酒が飲まれる。＞

(3') En af rockerne slog Peter ned i aftes.

＜暴走族の一人が昨夜ペーターを殴り倒した。＞

(4') Man kan stadig købe den omtalte bog hos N.N.

＜その話題の本を某本屋でまだ買うことができる。＞

能動態と受動態の関係を詳しく論ずるのは別の機会に譲るとして、拙論では(5), (6)のような一般に中動態あるいは中間態 (medium) と呼ばれるものを扱う。しかし拙論では中動態あるいは中間態という印欧語文法や古ギリシャ語文法の用語は踏襲しない。(5), (6)のような文は能動態にも受動態にも態の変換が不可能であり、非能動態であると同時に非受動態であると考えることができる。すなわち態に関して中立するものと考えることができる。したがって、これらを拙論では中立態と呼ぶ。

(5), (6)から明らかなように、中立態は s-形動詞により構成されている。(5)の mødes, skilles は møder, skiller という能動形を有し、また skilles は De to haver skilles af en hæk. <その二つの庭は一つの垣根によって隔てられている。>のような受動態を構成することができる。一方、(6)の synes には *syne(r) という能動形は存在しない。また synes は受動態を構成することもない。このsynes のような動詞を, verba deponentia <能動形 (および受動的意味) を放棄した動詞>というラテン語文法の用語を用いて deponente verber と呼ぶ。

中立態には、いくつかの手段によって書き換えが可能なものと、そうでないものがある。拙論では書き換えの可能性によって中立態を分類し、中立態というものを考える。ただし、一つのグループに適用される種々の書き換えが、そのグループに属する全ての動詞に適用されるとは限らない。また deponente verber には能動形がない上、受動態を構成することがないのであるから、書き換えそのものが不可能な場合が多い。その場合は deponente verber の意味を考慮して分類する。また拙論では比較的新し

いデンマーク語の標準語を扱い、方言や俗語や幼児語は原則として扱わない。したがって、参考文献で挙げた文法書類に見られる s-形動詞でも、参考文献で挙げた三つの辞書に見られないものは扱わない。また、これらの辞書に見られる s-形動詞でも現在では用いられなくなっているものがあるが、その場合は *印を付けて示す。さらに、s-形動詞は少数のものを除いては、一般にその使用が避けられる傾向にあることも付言しておく。

備考： 受動態と中立態の両方を構成する s-形動詞のいくつかのものは、音声上の相違を示すと言われている。Diderichsen (1976: 115f., 118) によれば、書きことばでは受動形と中立形は不定詞／現在形や過去形で同形であるが、命令形や叙述用法の過去分詞 (supinum⁽¹⁾) では中立形のみ可能で、受動形としての s-形は存在しない。また話しことばでは、いくつかの動詞の直接法現在形や不定詞において、受動形と中立形とでは音声的に異なると述べている。⁽²⁾

2. 書き換え可能な中立態

2.1. 複数主語を要求する中立態

2.1.1. 中立態 A／相互的中立態

(7) Drengene slås. <男の子たちは喧嘩している。>

(8) Børnene skændes. <子供たちは言い争っている。>

例文(7), (8)を見て分かるように、現実にはなかなか現れないような、そして時には奇妙にさえ感じられうる文を示すこともあるが、それは情報量が不足しているからであり、例文が非文法的だからではない。例えば、(7)の場合には på gaden <道で／路上で>や時の副詞 altid <いつも> などを入れればより自然な文になる。しかし文法を扱う拙論では、簡潔さを求めるとき、敢えてそのような例文を示すこともある。さて(7)の slås

は＜殴り合う，喧嘩する＞を意味し，(8)の skændes は＜言い争う＞を意味する。これらの意味は「お互いに～しあう」ということである。また，これらは自動詞として機能している。したがって，この種の中立態は相互代名詞 hinanden を用いることによって能動形を含む文に書き換えることができる。それゆえ，この種の中立態を相互的中立態と呼ぶ。⁽³⁾そして，この hinanden による書き換えを「書き換え a」と呼ぶ。

相互的中立態は「書き換え a」により次のように書き換えることができる。⁽⁴⁾

(7) → (7a) Drengene slår hinanden.

(9) Søren og Hanne mødes. <セアンとハネは会う。>

→ (9a) Søren og Hanne møder hinanden.

備考：(8)は「書き換え a」では Børnene skænder på hinanden. となる。それは skænde が今日，この意味では på で始まる前置詞句を支配するからである。

相互的中立態の「お互いに～する」という意味から，相互的中立態と能動態の関係は次のように考察される。⁽⁵⁾

(10) Hans og Ole slås. ↔ $\begin{cases} \text{Hans slår Ole.} \\ \text{＜ハンスはオーレを殴っている。＞} \\ \text{Ole slår Hans.} \end{cases}$

その意味から明らかなように，相互的中立態は基本的に双数主語を要求するが，(7)の drengene のように 3 人以上／大勢の場合もある。

- (7) Drengene slås. ↔ { { Dreng A slår dreng B.
Dreng B slår dreng A.
Dreng A slår dreng C.
Dreng C slår dreng A.
↓
Dreng A slår dreng N.
Dreng N slår dreng A.
Dreng B slår dreng C.
Dreng C slår dreng B.
Dreng B slår dreng D.
Dreng D slår dreng B.
↓
Dreng B slår dreng N.
Dreng N slår dreng B.
↓
Dreng (N-3) slår dreng (N-2).
Dreng (N-2) slår dreng (N-3).
Dreng (N-3) slår dreng (N-1).
Dreng (N-1) slår dreng (N-3).
Dreng (N-3) slår dreng N.
Dreng N slår dreng (N-3).

また、一方の主語（以下 S と略す）を前置詞 med に支配される名詞句、すなわち共起主語（consubjectum）（以下 CS と略す）にすることによって単数主語の文に書き換えることができる。以下この構文を CS 構文と呼ぶ。そして、この CS 構文による書き換えを「書き換え b」と呼ぶ。⁽⁶⁾

(9) → (9b) Søren mødes med Hanne.

<セアンはハネと会う。>

(10) → (10b) Hans slås med Ole.

<ハンスはオーレと喧嘩している。>

(9b) の主語 (Søren) と共起主語 (Hanne) は両方とも有意志 (volens) であるので、S と CS の位置を置き換えた文 (9b') Hanne mødes med

Søren. が可能である。このような S と CS を置き換えることのできる CS 構文は対称的 (symmetrisk) CS 構文と呼ばれる。ところで (9b), (9b') は *Søren mødes. や *Hanne mødes. というように、それぞれの CS を削除することはできない。なぜなら mødes は主語が単数の時は med+CS を必ず要求するからである。この CS は義務的 CS と呼ばれる。義務的 CS を伴った構文において、CS が有意味であり、対称的 CS 構文を構成する時には、この CS は S の位置に繰り上げることが可能である。このようにして (9b) から (9) を生成することもできる。(9) のような場合には複数主語が要求されるが、集合名詞も可能である。⁽⁷⁾

備考： 義務的共起主語に対し随意的共起主語もある。例えば、Hans spiller fodbold med Ole. <ハンスはオーレとサッカーをする。> という文において、共起主語 (Ole) を削除することができる。したがって、この共起主語は随意的共起主語と呼ばれる。そしてこの文は次のような書き換えが可能である。

Hans spiller fodbold med Ole. → { Hans spiller fodbold.
Ole spiller fodbold. } →
→ Hans og Ole spiller fodbold.

そして矢印を逆に向けることもできる。

skilles¹ <(人)が別れる>も相互的中立態を構成する。

(5) Vi mødes og skilles.

<我々は会い、そして別れる／逢うは別れの始め。>

(11) Det er kedeligt at skilles på den måde.

<こんなふうに別れるのは残念だ。>

この場にも「書き換え b」が適用されるが、skilles¹ は前置詞 med ではなく前置詞 fra による CS 構文を取る。

(12) Peter og hans ven skiltes.

<ペーターとかれの友人は別れた。>

→ (12b) Peter skiltes fra sin ven.

＜ペーターはかれの友人と別れた。＞

相互的中立態はまた 前置詞句 med hinanden ＜お互いに＞ を付加することにより次のような書き換えが可能なものもある。⁽⁸⁾

(7) → (7c) Drengene slås med hinanden.

(9) → (9c) Søren og Hanne mødes med hinanden.

これを「書き換え c」と呼ぶ。「書き換え c」における med hinanden は文法的にみて明らかに 冗語法 (pleonasmе) の用法であるが、「お互いに」という意味を強調するために用いられることがある。⁽⁹⁾

相互的中立態を構成する s-形動詞の例: bides ＜噛み合う; *口論する＞, *brydes¹ ＜とっ組み合う; (意見・利害などが)衝突する＞, *favnes ＜抱き合う＞, forliges ＜仲良くやってくる＞, følges (ad) ＜一緒に行く; (物事が)相伴う, 両立する＞, hjælpes (ad) ＜助け合う＞, *kriges ＜互いに戦う＞, krydses ＜互いに交差する＞, *kys ses ＜互いに接吻する＞, mødes/ses/træffes¹ ＜互いに会う＞, omgås¹ ＜交際する＞, *puffes/*skubbes ＜押し合う＞, *rives/toppes ＜喧嘩する, 口論する＞, skilles¹ ＜(人が)別れる＞, skændes ＜口論する＞, slås ＜喧嘩する＞, snakkes(ved)/tales (ved) ＜話し合う＞, *strides ＜喧嘩する, 互いに戦う＞, *trænges ＜群がる, 押し寄せる＞等;

deponente verber: enes ＜意見が一致する; 仲良くやってくる＞, *gantes ＜(異性と) いちゃつく＞, kappes ＜競争する＞, *kives/*kævles/*mundhugges/*trættes/*tvistes ＜口論する, 言い争う＞, *nappes ＜喧嘩する; 口論する＞, *næbbes ＜(鳥が) くちばしを触れ合う; 接吻する; 口論する＞等。

注意 1: *印は当該語句が古い用法であり現在では, 全くあるいはほとんど用いられないことを示す。また, 当該語句が現在ではある意味を失ったことを示すこともある。

注意 2: 単語の右肩上の数字は, 当該単語と同形のものが別のタイプ

の中立態を扱ったセクションでも現れることを示す。例えば, *træffes* は §3.1.1.にも現れる。

注意 3 : *ses* には「書き換え a」は適用されず, *skilles*¹ には「書き換え a」と「書き換え b」が適用されない。また上に示した動詞は「なんらかの方法で争う」という意味を持つものが多いということは注目に値する。

備考 1 : Aage Hansen (1967: 57) は, *omgås* は s-形動詞が他動詞として用いられる唯一のケースであると説明する。

(i) *De omgås hinanden en del.*

<かれらは, お互いにかなり付き合っている。>

(ii) *Han omgås dem meget.*

<彼は, かれらとよく付き合っている。>

(iii) *Sig mig, hvem du omås, og jeg skal sige dig, hvem du er.*

<君が誰と付き合っているか言いなさい。そうすれば, 君がどういう人か言いましょう。>

しかし (i)–(iii) の *omgås* は動作を表していない。したがって (i) の *hinanden*, (ii) の *dem*, (iii) の *hvem* は受動者ではなく, 補語と考えられる。すなわち *omgås* はここでも他動詞ではなく自動詞として機能していると考えられる。

備考 2 : **tvistes* は受動態を構成することがあるが, **tvistes* は *deponent verbum* であるから, この受動態の用法は誤用にもとづくものであり, 例外的用法と考えられる。

*Der kan *tvistes om dette spørgsmål.*

<この問題について口論されている。>

2.1.2. 中立態 B / 再帰的中立態 1

このセクションで扱う s-形動詞は「婚約する」, 「結婚する」, 「離婚する」という意味を表す一連の動詞に代表される。

(13) Peter og Hanne skal giftes på søndag.

＜ペーターとハネは今度の日曜日に結婚する。＞

このような中立態は再帰代名詞 sig⁽¹⁰⁾ を用いることにより動詞の能動形を伴う文に書き換えることができる。この書き換えを「書き換え d」と呼ぶ。そしてこのような中立態を「再帰的中立態 1」と呼ぶ⁽¹¹⁾。ただしこの場合, gifte sig は「未来の予定」を表す skal とは共起できないので, 拙論では tænker på at <〜しようかと思う>を便宜上用いる。

(13) → (13d) Peter og Hanne tænker på at gifte sig på søndag.

再帰的中立態 1 は二個体間の係わりを表すものである。したがって常に双数主語を要求する。これは相互的中立態を思い起こさせる。しかし相互代名詞 hinanden による「書き換え a」は適用されない。一方 CS 構文による「書き換え b」は可能で, 単数主語の文に書き換えることができる。

(13) → (13b) Peter skal giftes med Hanne på søndag.

＜ペーターはハネと今度の日曜日に結婚する。＞

同様に(13)の書き換え構文(13d)にも「書き換え b」が適用される。

(13d) → (13b') Peter tænker på at gifte sig med Hanne
på søndag.

さらに(13)は二個体間の係わりを表すのであるから相互的中立態と同様に med hinanden による「書き換え c」が適用される。

(13) → (13c) Peter og Hanne skal giftes med hinanden
på søndag.

「書き換え c」はまた(13d)にも適用される。

(13d) → (13c') Peter og Hanne tænker på at gifte sig med

hinanden på søndag.

再帰的中立態 1 を構成する giftes, forloves <婚約する>, skilles² <離婚する>は、法の助動詞との共起においてのみ用いられるという点で特殊である。なお、skilles² <離婚する>には「書き換え d」は適用されない⁽¹²⁾。また現在形では、giftes, forloves に関しては gifter sig, forlover sig, そして skilles² には bliver skilt が用いられる。過去形では blev gift/forlovet/skilt が用いられる。一方、「(人が)別れる」という意味の skilles¹ では skiltes という過去形が可能であり、この点で skilles² とは異なっている。このように見ると、skal/vil giftes, gifter sig, blev gift など是一種の補充動詞 (suppletivt verbum) を形成しているとも言えるかも知れない。また parres <(動物が)つがう, 交尾する>には、上に示した三つの動詞に関して言える諸々の制限はない。これは、parres と他の三つの動詞との意味上の相違を考えると理解できるであろう。

再帰的中立態 1 を構成する s-形動詞の例: forloves, giftes, parres, skilles² 等。⁽¹³⁾

2.1.3. 中立態 C / 再帰的中立態 2

(14) Folk samles på torvet. <広場に人があつまる。>

(15) Alle flokkes om ham. <みんなが、彼の周りに群がる。>

このような中立態は再帰的中立態 1 と同様に、再帰代名詞 sig による「書き換え d」が適用される。

(14) → (14d) Folk samler sig på torvet.

(15) → (15d) Alle *flokker sig om ham.

上に示したように、*flokker sig は現在では用いられることはなく、もっぱら flokkes が用いられる。一方 *fylkes <整列する; 寄り集まる>は現在用いられることはなく、fylker sig がもっぱら用いられる。ただし、これは文法的理由に起因するものではない。

この種の中立態は「書き換え d」が適用されるという点では再帰的中立

態1を思い起こさせるが、後者が双数主語を要求するのに対し、これは最低三個体以上からなる複数主語あるいは集合名詞からなる主語を要求する。したがって、これを「再帰的中立態2」と呼ぶ。再帰的中立態2は結果として集合を構成するに至る協力や共同作業を表す。例えば *flokkes* と **fylkes* は集団 (*alle* も含む) を表す主語を常に要求する。したがって CS 構文による「書き換え b」は *flokkes* と **fylkes* には適用されない。例えば *Hold A flokkes om bolden.* <A チームはボールの周りに群がっている。>において、主語 *hold A* は一つの集団を表す集合名詞であり、単数主語と *med*+CS に分解することは不可能である。

再帰的中立態2を構成する s-形動詞の例：*flokkes* <群がり集まる>，**fylkes* <整列する；寄り集まる>，*samles* <集まる>等。

2.2. 複数主語を要求しない中立態

2.2.1. 中立態 D / 再帰的中立態 3 / 漸進的中立態

(16) *Mælken *skiltes.* <そのミルクは凝結した。>

(17) *Vejret *bedres (dag for dag).*

<天気は(日毎に)良くなる。>

(18) *Situationen ændres (fra time til time).*

<状況は(刻々)変化している。>

この種の中立態では<徐々に何かが起こる>ということが表現される。したがって、これを「漸進的中立態」と呼ぶ。

漸進的中立態は、概して再帰代名詞 *sig* による「書き換え d」が適用される。したがって、これを「再帰的中立態3」と呼ぶ。

(16) → (16d) *Mælken *skilte sig.*

(17) → (17d) *Vejret bedrer sig (dag for dag).*

(18) → (18d) *Situationen ændrer sig (fra time til time).*

しかし §1 の終わりで既に述べたように、*deponente verber* には「書

き換え d」は適用されない。漸進の中立態は、また blive + 述語（形容詞／名詞）の構文で書き換えることのできるものもある。これを「書き換え e」と呼ぶ。「書き換え e」は deponente verber に適用される場合もある。

(17) → (17e) Vejret bliver bedre (dag for dag).

(19) Det dages. <夜が明ける／空が白む。>

→ (19e) Det bliver dag.

(20) Når dagene længes, begynder vinteren at strenges.

<(冬至が過ぎて)日が長くなると冬が厳しくなり始める。>

→ (20e) Når dagene bliver længere, begynder vinteren at blive strengere.

漸進の中立態を構成する s-形動詞の例：*bedres <よくなる>，heles/læges <(傷などが)癒える>，modnes <(果実などが)熟する，(人，動物などが)成熟する>，opløses <分解する，壊れる>，*skilles³ <ミルクが)凝結する；(雲や霧などが)晴れる>，ændres <変わる>，ældes <年を取る，ふける>等；

deponente verber の例：dages <夜が明ける，空が白む>，forældes <古くなる，すたれる>，*grønnes <緑になる>，*strenges <厳しくなる>，*længes [過去形：længedes] <(時間的に)長くなる>等。

注意： heles, læges, modnes, *skilles³ に並行して hele, læge, modne, skille という能動形もある。

2.2.2. 中立態 E / 再帰的中立態 4 / 感情状態の中立態

このセクションで扱う全ての動詞（そしてそれらが構成する中立態）は、古い表現であり現在では用いられない傾向にある。しかし、それらは中立態の一つのタイプを構成しているので、敢えて扱うことにする。

(21) Han *græmmes over sin fars død.

＜彼は父親の死を深く悲しんでいる。＞

(22) Han *ynkes over hende.

＜彼は彼女を哀れに思っている。＞

これらは græmmelse ＜悲しみ＞や medynk ＜哀れみ, 同情＞を感じる／抱く (føle) ということである。ただし受動態を構成する s-形もあるが中立態とは異なった意味を持つ。⁽¹⁴⁾

(23) Han *græmmes af sorgen. (受動態)

＜彼はその悲しみに打ちひしがれている。＞

(24) Han *ynkes af alle. (受動態)

＜彼はみんなに同情されている。＞

(21), (23)では, han *græmmes の部分の意味の相違が明確ではないが, (22), (24)では意味の違いが判然としている。

(21), (22)は再帰代名詞 sig による「書き換え d」が適用される, したがって「再帰的中立態 4」と呼ぶ。

(21) → (21d) Han *græmmer sig over sin fars død.

(22) → (22d) Han *ynker sig over hende.

この種の中立態は「～の感情を抱いた状態にある」ことを意味し, 未完了アスペクトを表すと考えられる。したがって, これを「感情状態の中立態」と呼ぶ。

感情状態の中立態／再帰的中立態 4 を構成する s-形動詞の例: *frydes ＜嬉しがる, 喜ぶ＞, *glædes ＜喜ぶ＞, *græmmes ＜悲しむ＞, *ynkes ＜哀れに思う, 同情する＞, *ængstes ＜心配する＞等:

deponente verber: *blues ＜恥じる＞等。

2.2.3. 中立態 F／感情変化の中立態

(25) Pigerne forskrækkedes ved larmen.

＜女の子たちはその音にぎょっとした。＞

(25) は Pigerne forskrækkedes af larmen. ＜女の子たちはその音

にぎょっとさせられた。＞という受動態とは異なっている。すなわち、(25)においては動作主は考えられておらず、*følte skræk* <驚いた>を意味しており、感情の変化を表している。⁽¹⁵⁾したがってこれを「感情変化の中立態」と呼ぶ。感情変化の中立態は感情状態の中立態を思い起こさせるが、前者には再帰代名詞 *sig* による「書き換え d」は適用されない。一方、この場合は *blive* + 過去分詞派生の形容詞（したがって原則として性・数の一致あり）の構文による書き換え、すなわち「書き換え e」が可能である。

(25) → (25e) *Pigerne blev forskrækkede ved larmen.*

備考： deponente verber の **ræddes*/**trættes*/**vredes* は *blive* + 形容詞 *ræd*/*træt*/*vred* の構文による書き換えが可能である。そして現在ではむしろこの表現が用いられる。

感情変化の中立態は「～の感情を抱くようになる」という感情の経過を表し、完了アスペクトを表すと考えられる。この点も感情状態の中立態とは異なる。

感情変化の中立態を構成する s-形動詞の例： *forarges* <憤慨する；あきれる>，*forbavses* <驚く>，*forfærdes/forskrækkes* <仰天する，びっくりする>，**fortørnes*/**harmes* <怒る>，*kvæles* <(喉を詰まらせて)むせる>，**ækles* <うんざりする，胸が悪くなる>等；

deponente verber： **ræddes* <恐れる>，**trættes* <疲れる>，**vredes* <怒る>，*væmmes* <うんざりする，胸が悪くなる>等。

3. 書き換え不可能な中立態

この種の中立態は §2 の中立態とは異なり書き換えが不可能である。したがって「書き換え」の可能性によって分類することはできないので、その他の統語・意味上の特徴にしたがって分類する。

3.1. 完全自動詞として機能する s-形動詞による中立態／中立態 G

「存在の動詞」 findes, gives, træffes⁽¹⁶⁾:

(26) Sådanne skabninger fandtes i Afrika.

＜そのような生き物がアフリカにいた。＞

(27) Der gives ikke mange som hun.

＜彼女のような人はあまりいない。＞

(28) Natravne træffes sjældent i Danmark.

＜ヨタカはデンマークには稀にしかいない。＞

その他の動詞に brydes³ ＜(光線が) 屈折する＞や færdes ＜動く, 歩く; しばしば行く＞, rygtes ＜うわさが広まる＞, trives ＜栄える; (人, 植物が) 丈夫に 育つ; 快適である＞——最後の 三つの動詞は deponente verber である——などがある。

(29) Lysstrålerne brydes.

＜光線は屈折する。＞

(30) Han færdes meget på restauranter.

＜彼はレストランによく行く。＞

(31) Begivenheden er rygtedes over hele byen.

＜その出来事は町中のうわさになった。＞

(32) Han trives ikke på sin arbejdsplads.

＜彼は職場でうまく行かない。＞

3.2. 不完全自動詞として機能する s-形動詞による中立態／中立態 H

(33) Bordet synes større, end det i virkeligheden er.

＜そのテーブルは実際より大きく見える。＞

(34) Han synes, at ideen er dårlig.

＜彼はその考えは良くないと思う。＞

(35) Det er lykkedes dem at få en lejlighed.

＜かれらは首尾よくアパートを見つけることができた。＞

- (36) Han vil ikke kendes ved sin fader.

＜彼は自分の父親を自分の父親とは認めたくない。＞

- (37) Jeg har længtes efter at tale med dig.

＜私はあなたと話したいと待ちあぐんでいた。＞

この種の中立態においてs-形動詞は補語を要求する。補語は述語であったり、思考動詞の補文であったり、副詞や前置詞結合であったりする。したがって、これらの s-形動詞は不完全自動詞的であると考えられる。

- (38) Han omgås med skumle planer om at løbe fra det hele.

＜彼は全てから逃げようという汚い考えを抱いている。＞

omgås は本来、相互的中立態を構成するが (§2.1.1.参照), その場合は S も CS も有意志であり, したがって対称的 CS 構文を作る。これに対し S が有意志であり CS が無意志 (non-volens) の場合, omgås は対称的 CS 構文を構成せず非対称的 (asymmetrisk) CS 構文を構成する。それだから無意志な CS を伴う(38)は *Han og planer(ne) omgås. と書き換えることはできない。したがって, この場合の omgås は相互的中立態ではなく中立態Hを構成し, 常に不完全自動詞として機能していると考えることができる。因みに, この場合 omgås は転義として用いられており＜(考えなどを)抱く＞という意味である。このように本来は相互的中立態を構成するが転義において中立態Hを構成するようになったと思われるものに *drages med/trækkes med ＜～に苦しむ, ～に悩む＞等がある。

- (39) Patienten *drages med døden.

＜その患者は死にかけている (死の苦しみにある)。＞

- (40) Han trækkes med fattigdom og sygdom.

＜彼は貧困と病気に苦しんでいる。＞

中立態Hを構成する s-形動詞の例: brydes³ (mod)＜(波が～に当たって)砕ける＞, *drages (med)/trækkes (med) ＜～に苦しむ, ～に悩

む>, kendes (ved) <認める, 認知する; (見て) 思い出す>, mindes <思い出す>, omgås² (med) <考えなどを抱く>, omgås³/omgås³ (med) <扱う>, skyldes <～のせいである>等;

deponente verber の例: *fattes <～を欠く, ～がない>, lykkes <うまく行く, ～が成功する>, længes (efter) [過去形 længtes] <思い焦がれる, 切望する>, mislykkes <～が失敗する>, synes <～のようだ; ～のようだ(と思う)>; synes (om) <～を好ましく思う>, *times/*vederfares <～が起こる, 降りかかる>, *tækkes <喜ばせる>等。

備考: mindes は古い用法では受動態を構成することがある。これは, 恐らく誤用にもとづくものと考えられる。そして mindes のこの用法は, 現在では奇妙な感じを与えるようである。

Den begivenhed vil mindes længe.

<その出来事は長い間回想されるであろう。>

また omgås³ は omgås³ med という自動詞+前置詞の結合全体が他動詞的と解釈された上, med が落ちることが生じた時, omgås 自体が他動詞的と解釈されるようになったと考えられる。そしてこの場合には, omgås³ はごく自然に受動態を構成することができる。

Han skal omgås med forsigtighed.

<彼は慎重に扱われねばならない。>

したがって omgås³ は, 中立態を構成する動詞が受動態をも構成するという唯一の例外的な場合である(17)と考えることができる。

4. むすび

以上, s-形動詞による 中立態を 統語上および 意味上の 特徴により分類し, 検討した。中立態を構成する s-形動詞は (完全あるいは不完全) 自動詞として機能する。自動詞の少数のものは (2') Der drikkes meget

til jul i Danmark. のように受動態を構成することがあるが、自動詞は原則として受動態を構成することはない。中立態を構成する s-形動詞もまた原則として受動態を構成することはない。

拙論では中立態を構成する s-形動詞だけを扱ったが、それ以外にも受動態を構成しない動詞がある。⁽¹⁸⁾

(40) Han mangler mod. <彼は勇気がない。>

= (中立態 H) Han *fattes mod.

(41) Peter ligner Ole meget.

<ペーターはオーレによく似ている。>

(42) Hans arbejde gavnede Danmark.

<彼の仕事はデンマークのために役立った。>

(43) Ole barberer sig ofte. <オーレはしばしばひげをそる。>

(40)―(42)においては、動作性は表わされておらず、mod, Ole, Danmark は受動者ではないので、目的語ではなく補語と考えられる。それゆえ(40)―(42)は受動態に書き換えることはできない。⁽¹⁹⁾また(43)の再帰的表現は、受動態に書き換えること自体が無意味である。この型の再帰動詞は多いはずだし、s-形動詞との共通性を暗示するものである。⁽²⁰⁾このように動詞の能動形により構成される態にも、中立態と呼ぶのが最も妥当であると思われるものがある。⁽²¹⁾この種の中立態は能動態や受動態と共に別の機会に扱う。

(1986年9月9日)

注

(1) 一般には、s-形動詞の過去分詞を避けようとする傾向がある。例えば、de har slåedes. <かれらは喧嘩した。>は de har været oppe at slås. のように言い換えられる。Cf. Lomholdt 1982: 155.

(2) Cf. Aa. Hansen 1967: 56f., 62f.

(3) Diderichsen (1964: 57) は, giftes (拙論では中立態 B / 再帰的中立態 1) も

相互的としているが、拙論では hinanden による「書き換え a」が適用されるものを相互的中立態とするので, giftes は相互的中立態には入れない。

- (4) Cf. Lomholdt loc. cit., Aa. Hansen 1967: 56f.
- (5) Diderichsen (1976: 116) は, (7) のような文は同時に能動態と受動態を表し, その主語は動作主であると同時に受動者であるとする。しかし mødes のように, 対応する能動形 møde による能動態は存在するが受動態は存在しない動詞においては, この説明は適用されない。
- (6) Cf. Lomholdt loc. cit., Aa. Hansen 1976: 56.
- (7) Cf. E. Hansen 1971: 5-36.
- (8) Aa. Hansen 1967: 57.
- (9) 英語の A and B meet. と A and B meet each other. との関係を比較せよ。Cf. Jespersen 1924: 161.
- (10) Cf. Aa. Hansen 1967: 58.
- (11) Diderichsen (1964: 57) が giftes を相互的としたことは上の注 3 で触れたが, (1976: 117) では giftes は受動態を構成するとしている。しかし, 現在では意味の上からこの説はとても認められない。
- (12) Aa. Hansen (1967: 58) は, 「離婚する」という意味の skilles は blive skilt と同様に受動態を構成すると言う。しかしこれらは giftes/blive gift と同様に, 現在では受け身とは考えられない。
- (13) 参考文献に挙げた *Dansk-engelsk ordbog* には spændes <釣り合う> もあるが, これは現在では用いられることはなく, 代わりに gå i spænd (med/sammen) が用いられる。
- (14) Cf. Aa. Hansen 1967: 58f.
- (15) Cf. Aa. Hansen 1967: 58f.
- (16) Cf. Aa. Hansen 1967: 59.
- (17) Cf. Mikkelsen 1911: 345, Aa. Hansen 1965: 145f., 1967: 57, 60.
- (18) Cf. Lomholdt 1982: 142.
- (19) mangle, ligne, gavne は仏語でそれぞれ manquer de, ressembler à, profiter à と自動詞+前置詞に相当することも参考になる。
- (20) Cf. Mikkelsen 1911: 341ff., 376f.

- (21) Diderichsen (1976: 119) が verber uden diatese <態のない動詞>と呼ぶ、法の助動詞や非人称動詞などもここに含まれる。

Neutralis udtrykt ved s-verber i dansk

Toshihiro Shintani

Resumé

Ved behandling af diatesesystemet i dansk kan man nævne det aktive, det passive og det såkaldte mediale eller medium. Det sidstnævnte kalder jeg “neutralis” i denne artikel, fordi dette er neutralt i diatesesystemet. Dette udtrykker nemlig hverken det aktive eller det passive. I modsætning til det aktive og det passive tænkes der ikke på “patients” i neutralis, hvorfor passiv vending ikke er mulig. Neutralis udtrykkes enten ved aktiv form hos nogle verber, f. eks. *det regner meget* eller s-form, f. eks. *drengene slås på gaden*. I denne artikel behandles det sidstnævnte tilfælde ved en inddeling i nogle typer efter omskrivningsmuligheder samt betydninger.

参 考 文 献

I 文法書等

- Diderichsen, Paul (1964): *Essentials of Danish Grammar*, Copenhagen.
- “ ” —— (1976): *Elementær dansk grammatik*, 3. udg. København.
- Hansen, Erik (1971): “Jensen er nede i postkassen med et brev. Konstruktion med consubjectum i moderne dansk” *Danske studier* 66, pp.5-36, København.
- Hansen, Aage (1965): *Vort vanskelige sprog*, 2. udg. København.
- “ ” —— (1967): *Moderne dansk III*, København.
- Jespersen, Otto (1924): *The Philosophy of Grammar*, London.
- Lomholdt, Jørgen (1982): *Le Danois Contemporain*, Copenhagen.
- Mikkelsen, Kr. (1911): *Dansk ordføjningslære*, København.

II 辞書

Vinterberg, Hermann og Bodelsen, C.A. et al., 1966 *Dansk-engelsk ordbog*

I - II, 2. udg. København.

Bruun, Erik, 1978 *Dansk Sprogbrug*, København.

Jacobsen, Lis et al., 1984 *Nudansk ordbog* I - II, 12. udg. København.